

第IV章 自己像と関連して



1. 使っているものは固定しているか――

「若者は保守化したか」をメインテーマに据えて、これまでの考察を加えてきた。調査に先だって、当然のことながら仮説を設定する。その際に、正直にいえばもう少し、自分中心的で、社会的な視野の狭い若者が多いのではと予想していた。

しかしこまでのデータによると、社会問題に対する関心が深く、情報に敏感だとはいえないものの、高校生たちがそれなりに社会についての認識やものの見方を獲得しているのが目につく。

冒頭でふれたように、保守化とは行動の現状維持化、あるいは、変化を嫌がる態度と考えられよう。そこでここでは、使っているものをいつも決めているかどうかを尋ねてみた。

表14のように、生徒たちはシャンプーやカ

セットテープ、整髪料などはだいたい決めているという。しかし、メーカーやブランドを決めているものはそれほど多くはなく、ジーンズやスポーツシューズ、ジャージなどでもメーカーを決めていない者が最頻値を占めている。

大学生ならともかく、高校生たちは経済的な面から考えても、メーカーを固定するまでのこだわりを持たないのであろう。そして、女の子たちのシャンプー、そして、カセットのテープあたりになると、そろそろメーカーを固定化し始めている(表15)。いずれあと何年かすると固定化する対象が、Tシャツやジーンズ、シューズへと広がっていくのであろう。

表14 使っているものを決めているか
——シャンプーやカセットテープ——

No.	決めている		あまり 決めていない	どうでも よい	使って いない
	いつも	だいたい			
1. シャンプー	26.0	(36.6)	23.3	13.5	0.6
2. カセットテープ	23.6	(46.2)	22.2	7.3	0.7
3. オーディオ	17.5	(36.0)	32.5	10.6	3.4
4. 整髪料	17.0	(32.3)	28.6	11.6	10.5
5. 紅茶	11.5	20.1	(31.3)	28.1	9.0
6. ジーンズ	10.2	24.3	(42.1)	18.0	5.4
7. シャーペンの芯	9.6	15.5	31.8	(41.3)	1.8
8. スポーツシューズ	9.3	24.9	(34.4)	19.2	12.2
9. コーヒー	9.5	15.2	26.5	(27.6)	21.2
10. ワープロ・パソコン	8.7	11.7	15.0	9.6	(55.0)
11. ジャージ	7.8	20.9	(35.7)	22.3	13.3
12. バンバーガー	7.5	27.2	(38.0)	23.9	3.4
13. テニスラケット	7.0	9.9	14.6	12.4	(56.1)
14. 政党	6.9	6.3	20.1	(36.4)	30.3
15. バイク	6.8	8.8	8.2	7.1	(69.1)
16. アイスクリーム	6.0	18.4	(40.2)	31.0	4.4
17. 電子書籍	5.5	16.8	(40.1)	22.8	14.8
18. 水	5.3	13.3	(53.3)	26.7	1.4
19. モービル	4.5	4.9	9.6	9.6	(71.4)
20. ラバーブラシ	3.7	11.6	(34.7)	21.0	29.0
21. ドレーネー	3.4	12.8	(56.5)	25.7	1.6
22. セーター	2.9	10.6	(59.1)	25.2	2.2

() = 最頻値

表15 使うものを決めている
—女の子のシャンプーは固定—

(%)

		洗顔料				
		16.3	26.3	31.4	24.8	1.2
	(33.9)	44.8	16.8	4.4	0.1	
	24.4	34.5	25.0	15.6	0.5	
	25.7	39.6	21.9	12.2	0.6	
	(31.2)	36.5	21.2	10.5	0.6	
	26.0	36.6	23.3	13.5	0.6	
	24.8	42.2	21.9	9.6	1.5	
	22.5	49.4	22.5	5.5	0.1	
	23.3	46.1	21.3	8.4	0.9	
	21.5	48.8	22.9	6.5	0.3	
	28.1	45.9	19.3	5.8	0.9	
	23.6	46.2	22.2	7.3	0.7	

2. どんな自己像を持っているのか――――――

こうした形でデータを追い求めてくると、保守化というよりそれ以前の問題として、生徒たちのフィーリング感覚を大事にする生き方が目につく。

そこであらためて生徒たちに、自分をどう考えているのかを尋ねてみた。表16にその結果をくわしく紹介しておいたが、生徒たちの自己像は以下のようになる。

学校で授業をはじめに受け(53.9%)、帰宅してから音楽を聴くのが好きだ(57.1%)、マンガは好きだが、自分で描くのは得意でないし(74.9%)、けんかなんかをするのは苦手だ(70.2%)。自分としてはまじめな生徒のつもりだというのが、高校生たちの平均的な自己像となる。

そして、そうした自己像は図19から明らかのように、女の子たちにオシャレな感覚がより多く認められるものの、基本的には男女の差がなく、音楽好きのまじめな生徒像がうかんでくる。

そうした中で、仮に二分するなら、

- | | |
|---------------|---------|
| ① 授業をきちんと聞く | まじめなタイプ |
| ② 好きな作家の本を読む | |
| ③ 外国人に道を教えられる | |
-
- | | |
|---------------|-----|
| ① 友だちとタべるのが好き | 遊び派 |
| ② ノートにらく書きをする | |
| ③ 占いを見るのが好き | |

となる(表17)。進学という望みを持っているから、意欲を持って、まじめな努力家としての生活を送れる、しかし、そうした望みを持てなくなると意欲が失われ、オシャベリや音楽、占いなどへ生徒たちの心が傾斜していくのであろうか。

図20によると、生徒たちは血液型や星占いなどの占いをとても気にするつもりはないが、わりとなら気になるという。そして図21~22のように、男子よりも女子のほうが占いを気にする子が多いが、これは経験的にも納得できる傾向であろう。また専修学校群のほうに占いに关心を持つ者が多いのも、なんとなくもっとものように思える。

表16の自己像についての設問を形をかえて、自分がどんなタイプなのかを尋ねてみた。表18がその結果だが、政治や経済はくわしくないが(74.8%)、音楽好きのタイプ(61.6%)だという。そして、男子よりも女子は音楽好き、しゃれた店が好き、気に入った店で服を買うタイプが多い(図23)。

そして、表19でも表16と同じように、生徒たちの進路と関連させてみると、音楽が好き、演歌がうまいなどのプレー派が専修学校群に多く、それに対し政治や経済にくわしい、生徒会に熱心など、まじめ派的な傾向がむずかしい大学進学群に多いような印象を受ける。

表16 自己像

—音楽好きのまじめな子—

	まったく そのとおり	わりと そう	まあそ う	あまり そうでない	せんぜん そうでない	(%)
1. 好きな歌手の新曲ができると、レコードを買ったかセレクトapeにこなリする。	33.3	23.8	20.8	14.0	8.1	
2. 授業中のノートは、きちんととっている。	23.9	30.0	26.4	13.9	5.8	
3. 友だちとダベったり、遊んでいるなら徹夜も平気だ。	27.0	22.9	18.8	21.5	9.8	
4. 本やノートにらく書きをする。	15.2	17.8	26.9	26.3	13.8	
5. 好きな作家の本は、たくさん読んでいる。	15.3	17.4	22.3	27.6	17.4	
6. 外国で人気のある歌手がわかる。	10.6	21.1	30.1	25.6	12.6	
7. 友だちと遊びに行った先で、新しい友だちができる。	11.6	20.0	31.0	29.0	8.4	
8. 毎週・毎月、占いを見ている。	15.8	12.7	18.3	23.1	30.1	
9. 体育祭や文化祭になるとはりきるほうである。	10.6	16.2	29.3	29.7	14.2	
10. 「レモン」や「ボハイ」などのフレッシュメント・結婚は、気にして見ている。	10.4	15.9	22.0	26.1	25.6	
11. けっこいい妹までできる交際がある。	8.3	14.4	18.3	27.4	31.6	
12. 髪型に手を加えるなど、かっこうを気にする。	8.2	13.3	28.4	35.4	14.7	
13. その辺を走っている車の車種・メーカーがわかる。	7.1	13.4	20.6	28.5	30.4	
14. 外へ出かけるときは、なんとかなさいうなづく。	6.1	13.2	27.8	38.5	14.4	
15. 実験室の実験をする。	7.1	12.1	32.1	36.2	12.5	
16. ランニングをする。	6.1	9.4	17.2	31.6	35.7	
17. バスケットボールをする。	3.8	8.7	14.8	26.0	46.7	
18. 犬や猫へのおみやげをくれる。	3.9	6.8	13.3	36.5	39.5	
19. けんかになると、泣かない。	3.8	6.8	19.2	46.3	23.9	
20. マンガを描くのは好きで、うつとうつ。	3.5	6.2	15.4	34.9	40.0	

(○) = 最頻値

図19 自己像×性差

——女の子はオシャレな自分——

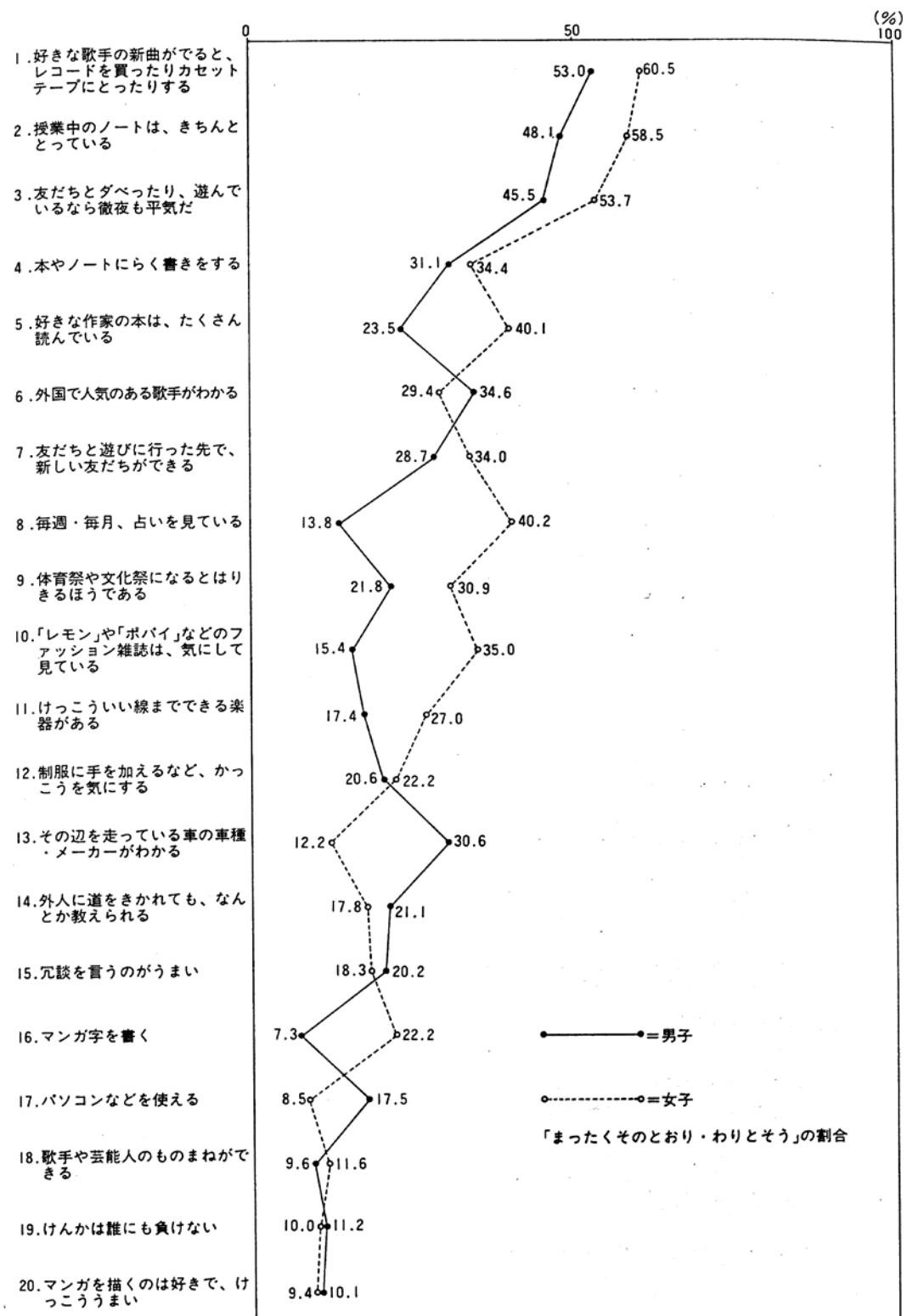


表17 自己像×進路
——まじめな進学群・遊びの専修群——

	むずかしい大学	やさしい大学	専修学校	(%)
1. 好きな歌手の新曲がCDやレコードを購入したり、音楽ステーションで聴いている	53.5	51.6	65.6	
2. 放課中の時間は、どうもどうしている	(59.1)	52.7	43.4	
3. おもしろいところを遊びで見る	44.2	47.9	60.7	
4. 本やノートにらく書きをする	36.1	29.5	41.2	
5. 好きな作家の本はたくさん読んでいる	(40.1)	29.1	38.2	
6. 外国で人気のある歌手がわかる	(42.3)	29.0	37.1	
7. 友だちと一緒に行った先で、新しい友だちができる	35.8	26.6	41.8	
8. 毎週、毎月、古いを見ている	31.1	22.8	(36.1)	
9. 体音楽や文化祭になるとはりきるほうである	(34.8)	20.0	29.3	
10. レモン、フレンチトーストなどのファッショントーストは、気に見ていている	27.2	22.3	(35.1)	
11. ピアノ、オルガンなどいろいろ楽器がある	(27.6)	19.8	23.2	
12. 電子機器に手を付けると、からこなれ気にならない	20.4	16.8	(27.0)	
13. オーディオ機器やCDプレーヤーの新しいメーカー	(28.5)	21.5	21.2	
14. テレビやラジオなどで、よくおしゃべりをうながす	(40.5)	16.4	14.8	
15. おもちゃやぬいぐるみをよくおもてなしする	20.0	18.4	(21.1)	
16. おもちゃやぬいぐるみをよくおもてなしする	10.6	11.1	(23.5)	
17. おもちゃやぬいぐるみをよくおもてなしする	(17.8)	12.5	13.0	
18. おもちゃやぬいぐるみをよくおもてなしする	13.0	8.0	(13.6)	
19. おもちゃやぬいぐるみをよくおもてなしする	(19.4)	7.8	9.1	
20. おもちゃやぬいぐるみをよくおもてなしする	(14.4)	8.1	10.2	

「まったくそのとおり・わりとそう」の割合

図20 占いを信じるか
——わりと気にする——

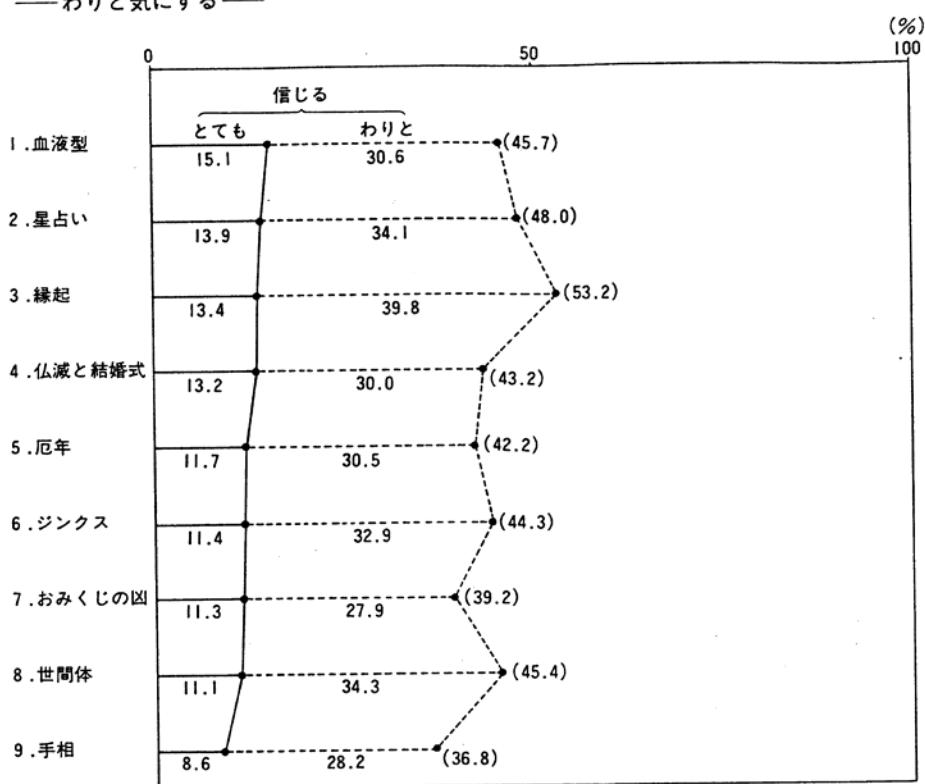


図21 血液型と性格を信じる
——女子は占い好き——

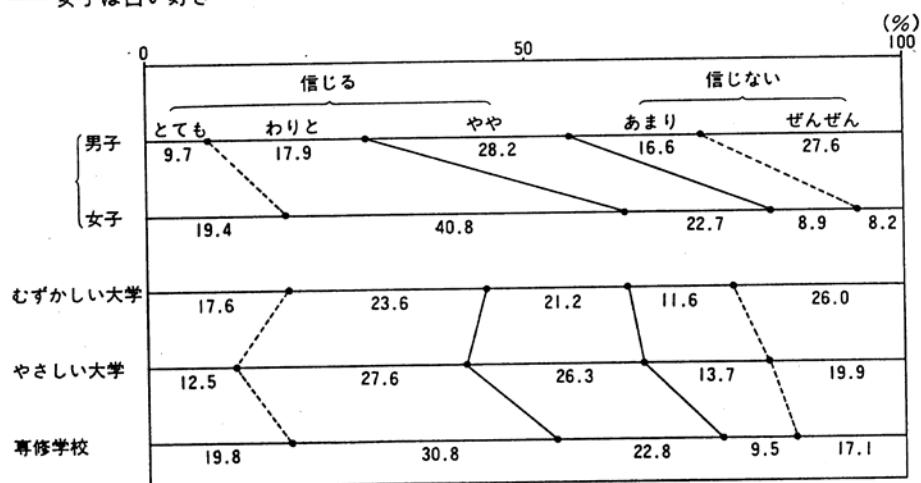


図22 星占いを信じるか

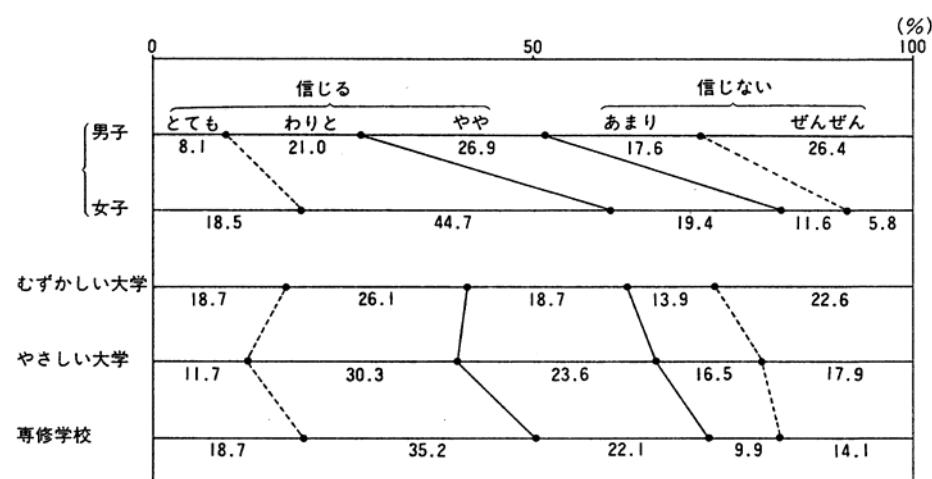


表18 どんなタイプか

—BGMを流しながら—

(%)

	あてはまる			ちがう	
	とても	かなり	すこし	かなり	まったく
1. 気分でBGMをかける。	(37.6) 61.6	24.0	24.3	7.0 14.1	7.1
2. 服を買う気に入った店がある。	17.4 38.2	20.8	(37.2)	13.2 24.6	11.4
3. くわしいスポーツがある。	17.4 36.4	19.0	(30.6)	15.9 33.0	17.1
4. しゃれた喫茶店を知っている。	8.8 22.3	13.5	(43.6)	19.3 34.1	14.8
5. 少し高くても雰囲気のよい店が好き。	7.2 19.8	12.6	(40.4)	24.2 39.8	15.6
6. 都会のいい店を知っている。	6.7 18.5	11.8	(37.5)	27.1 44.0	16.9
7. 自分のD.C.ブランドがある。	5.6 11.8	6.2	28.4	(31.2) 59.8	28.6
8. 音楽については誰にも負けないと かなりくわしい。	4.4 11.1	6.7	27.6	(38.2) 61.3	23.1
9. うるさい音楽を飲める。	4.0 7.8	3.8	14.7	23.5 77.5	(54.0)
10. 震感がある。	3.3 8.0	4.7	14.2	21.0 77.8	56.8
11. 空気を読むのが得意。	2.0 6.0	4.0	19.2	31.7 74.8	(43.1)
12. 大きなや短大に通う。	1.2 4.7	3.5	20.0	33.9 75.3	(41.4)
13. お酒を飲むのが得意。	1.6 3.3	1.7	9.3	25.5 87.4	61.9
14. お酒を飲むのが得意。	0.8 2.4	1.6	11.2	33.0 86.4	53.4

図23 どんなタイプ×性差
——女の子がオシャレに——

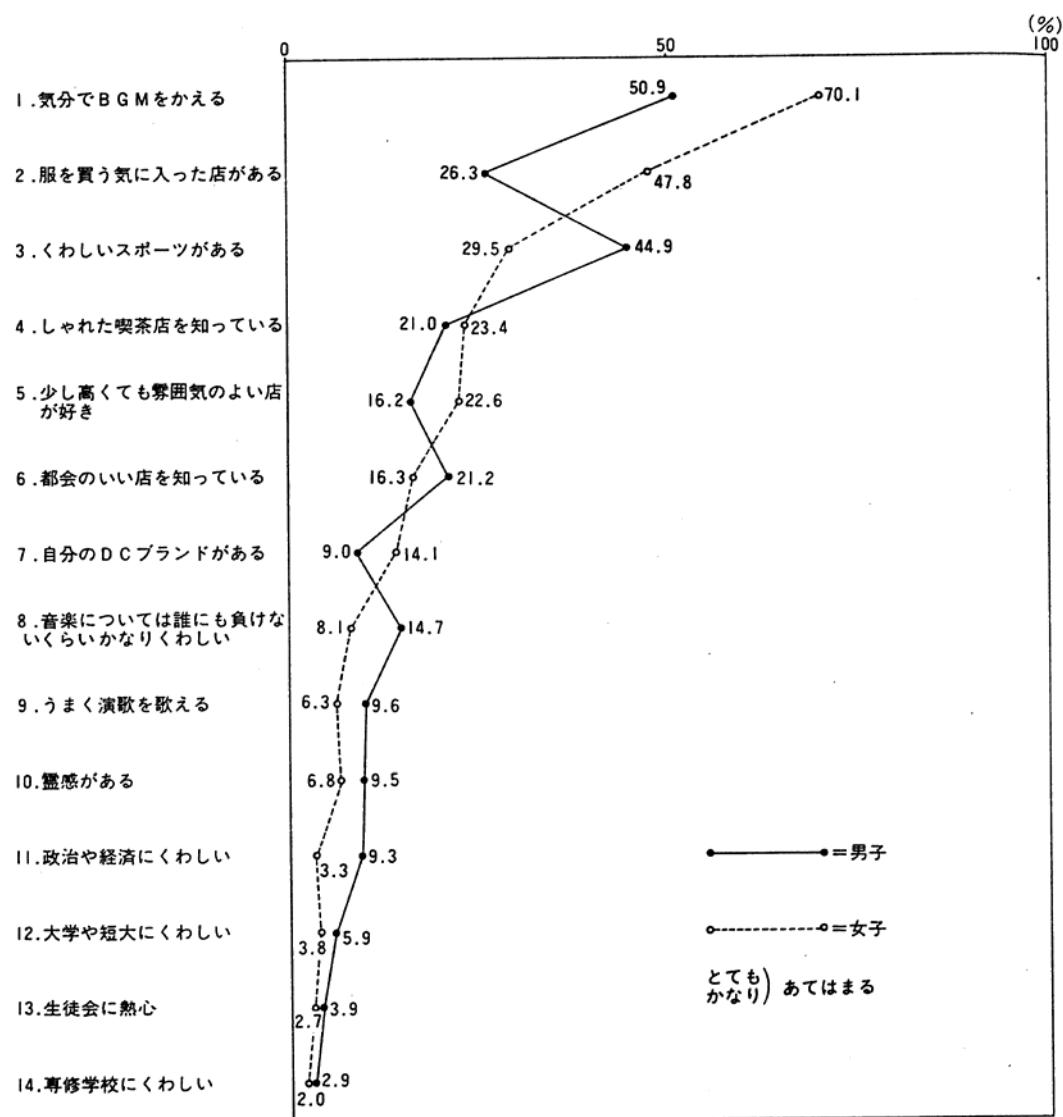


表19 どんなタイプ×進路

—進学群は自分に自信を持つ—

	少しある	やさしい人	(%)
1. 音楽にハマっている	58.6	55.4	74.3
2. カラオケボーカルがある	39.1	32.0	44.9
3. カラオケボーカルがある	46.4	39.2	33.1
4. レコード店を知っている	25.8	17.5	30.2
5. 少なくとも雰囲気の良い店が好き	25.4	15.5	23.4
6. 音楽の良い店を知っている	27.5	16.0	24.4
7. 自分のDCブランドがある	20.3	7.6	17.2
8. 音楽については誰にも負けないと自負している	16.4	9.7	14.5
9. ライブで音楽を歌える	11.0	6.7	11.4
10. 感感がある	11.9	7.1	9.0
11. 政治や経済に行く	16.8	7.1	4.9
12. 大学や短大に行く	16.1	3.2	1.4
13. 生徒会に就く	9.0	2.3	3.3
14. 音楽学校に行く	2.8	0.9	10.8

「とても+かなりあてはまる」割合

3. どんな高校生になりたいか

生徒たちのこうしたデータを分析していると、なんといっても、BGMとしての音楽が生徒たちの心の中で大きな比重を占めているのがわかってくる。世の中のこととはともかく、気に入った音楽を聴いていればしあわせという感じである。

そこでどんなタイプの高校生なのか、表18と同じ設問を用いて、どんな高校生になりたいのかを尋ねてみた(表20)。項目にもよるので

あろうが、生徒たちは音楽をもう少しうまくBGMとして使いたい、そして、スポーツがうまくなりたいという。

図24によれば、音楽やDCブランド、そして、しゃれた喫茶店などへのあこがれは、男子より女子に多く認められるが、女子に限らず、男子たちも、もう少ししゃれた高校生になりたいと願っているのであろう。

そして、そうした願いは表21によれば、専

表20 どんな高校生になりたいか
——しゃれた子になりたい——

(%)

選択肢	なりたい			なりたくない	
	とても	かなり	すこし	あまり	ぜんぜん
1. 知りでBGMをかける	32.6	17.8	(33.7)	9.9	6.0
	50.4			15.9	
2. 服を買う気に入った店がある	24.8	23.0	(34.3)	12.2	5.7
	47.8			17.9	
3. くわしいスポーツがある	(32.4)	20.4	31.6	8.6	7.0
	52.8			15.6	
4. しゃれた喫茶店を知っている	18.2	18.8	(42.8)	14.3	5.9
	37.0			20.2	
5. 少し高くても雰囲気のよい店が好き	17.8	17.5	38.4	17.9	8.4
	35.3			26.3	
6. 都会のいい店を知っている	23.2	20.1	(36.4)	13.6	6.7
	43.3			20.3	
7. 自分のD.C.ブランドがある	20.4	15.7	(34.3)	18.5	11.1
	36.1			29.6	
8. 高級については誰にも負けないくらい かなりくわしい	17.8	15.1	(35.7)	20.1	11.3
	32.9			31.4	
9. ファッション感覚がある	12.5	6.2	24.1	25.0	32.2
	18.7			57.2	
10. 舞踏ができる	11.2	5.8	17.7	19.0	(46.3)
	17.0			65.3	
11. おしゃれな人	20.2	18.1	(35.6)	13.2	12.9
	38.3			26.1	
12. おしゃれな店がある	18.5	20.3	(34.2)	13.0	14.0
	38.8			27.0	
13. おしゃれな服がある	6.1	5.9	(32.4)	25.8	29.8
	12.0			55.6	
14. おしゃれな音楽がある	9.7	12.0	(36.3)	23.0	19.0
	21.7			42.0	

修学校群のほうにより多く認められるが、そうした願いと現実とを対比させてまとめたのが図25となる。実線と点線のプロフィールが示すように、生徒たちは政治や経済のことについてもくわしくなりたいと思っている。しかし、それ以上に、しゃれたシティ感覚の持ち主になりたいというのである。

ミーイズムという言葉が流行したことがあ

った。自分の感覚を大事に、世の中のことより自分のフィーリングを優先させる生き方だが、高校生たちの調査でもそうしたフィーリング感覚がうかび上がってきた。これは保守化というのはまったく異質のカテゴリーで、保守、あるいは革新、というのでなく、フィーリングの判断に基づいて、好き嫌いでのごとを決めていく生き方なのであろう。

図24 どんな高校生になりたいか×性差

——女の子はファッショナブルに——

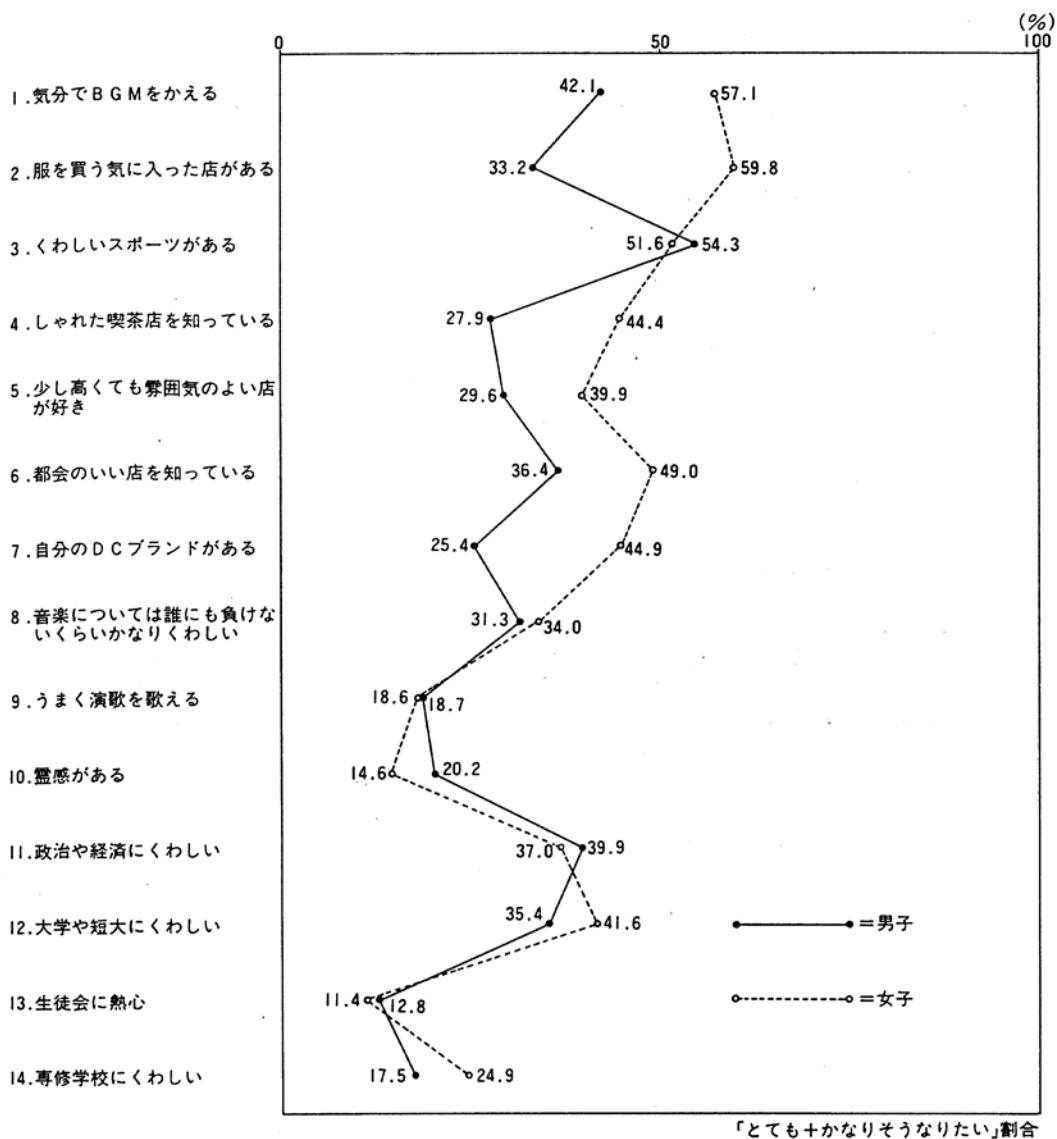


表21 どんな高校生になりたいか×進路

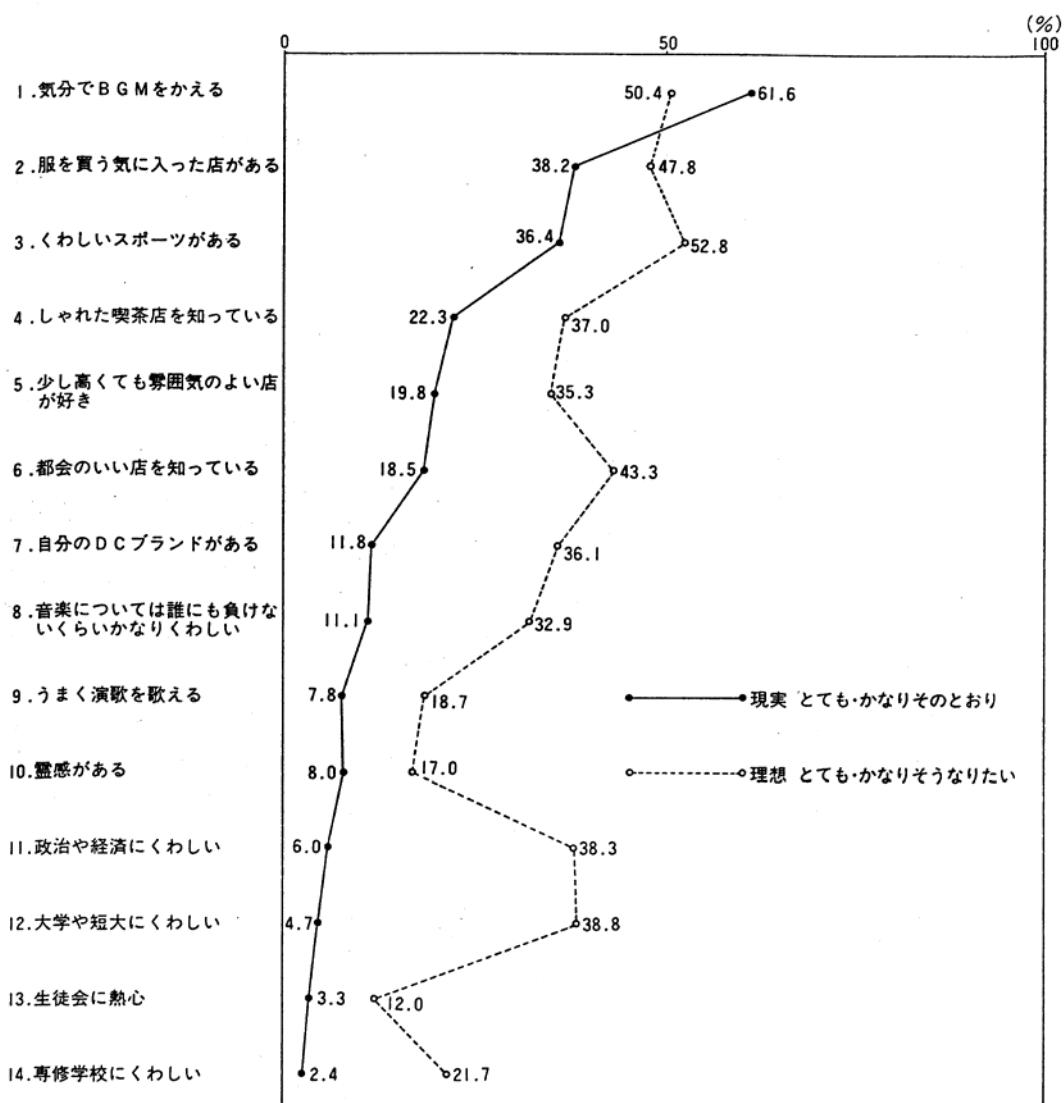
(%)

	必ず欲しい大学	どちらでもいい大学	どちらでもいい高校学校
1. 1時間でBGMをかける	46.3 = 45.7 < 59.7		
2. 音楽を賣つて入った店がある	41.3 = 42.5 < 58.6		
3. くわしいスポーツがある	62.8 > 52.1 = 53.2		
4. しゃれた喫茶店を知っている	34.3 > 31.6 < 50.0		
5. 少し高くて雰囲気のよし店が好き	35.3 > 31.5 < 38.2		
6. 都会のいい店を知っている	41.1 = 41.1 < 54.5		
7. 自分のD.C.ブランドがある	35.0 > 32.6 < 44.4		
8. 音楽については誰にも負けないくらいなりくわしい	36.7 > 29.7 < 39.2		
9. うまい音楽を覚える	24.8 > 16.4 < 23.2		
10. 露感がある	27.3 > 18.8 > 13.1		
11. 政治や経済にくわしい	55.6 > 38.0 > 31.2		
12. 大学生みたいにしたい	62.2 > 39.7 > 20.3		
13. 生活が豊か	21.7 > 10.1 = 10.6		
14. おしゃれ	23.2 > 15.2 < 53.4		

「とても・かなりそうなりたい」割合

図25 高校生の現実と理想

——もうちょっとシティ感覚を持ちたい——



第V章 エピローグ：保守化をめぐってのメモランダム



1. フィーリング感覚を越えて

保守化についての分析を行っているうちに、生徒たちは世の中のことについて、決して無関心なのではないと思うようになった。しかしそれ以上に、音楽やファッショングに关心が集まる、というより、生徒たちの中にはそうした身近な対象への关心が肥大になって、社会的な広がりなどは視野に入ってこなくなる。

そうなれば、ラジカセの音質やDCブランドの新しい傾向に关心が集中して、社会の動きが視野の外となる。それがおとなたちの目には無関心、あるいは、保守化のように思える。

しかし自分のフィーリングを優先させ、それの外のことには目をむけようとしないのは、

高校生だけの現象ではない。

子どもたちに「大きくなったらなになりたい」とたずねると、「別に」の返事がもどってくる。アンケート調査の結果でも、サラリーマンや公務員、そして、女の子では幼稚園の保母や小学教師がかなりの割合を占める。

そして、仕事の面でそれほど活躍できないかもしれないが、それだけにおののこと、幸せな家庭を築きたいという願いが強い。女の子たちは、結婚したら弁当を作つて夫に持たせたいと思い、男の子は、妻が病気になったら会社を休んで看病したいという。

子どもたちのあいだにマイホーム志向が強くとも非難する必要はないのかもしれない。

考え方によっては、高望みせずに堅実な人生設計を描いているともいえよう。フィーリング感覚もエコノミック・アニマルに対する姿勢として、それなりの評価も必要なかも知れない。

しかし、そうものわかりのよいことばかり言っているわけでもないようにも思う。子どもを対象とした国際比較調査を実施するので、アメリカのシアトルを訪れた。そして、「なにになりたいか」をたずねてみた。

弁護士や技師、難病を治療する医師、アメリカンフットボールの選手、バレリーナなど、どの子も目を輝かせてつきたい仕事について語る。

グレーハウンドバスの長距離ドライバーや看護婦、ハンバーガー店の経営者などにまじって、市長や知事、大統領になりたいという子がいる。

日本の子どもと比べ、つきたい仕事がはっきりしているのと同時に、ビッグな目標を掲げている子が多いのが目につく。

ほかの子たちにも、「大統領になってみたい」とたずねてみた。大半の子がなりたいと答え、その後、大統領になってなにをするかをめぐって、にぎやかな議論が始まった。

日本で、「総理大臣になりたい」などといえば、しゃれたジョークとして扱われることはあっても、心の底からそう思っている子に出会うことはまれだ。

こうした違いに興味をひかれたので、簡単なアンケートを作り、アメリカの子どもに答えてもらったところ、200サンプル程度の限られたものであったが、「なれるものなら大統領になってみたい」子は、男子の78%、女子の36%を占めた。

クアラルンプールの学校を訪ねたとき、子

どもたちに日本のこと話をしてほしいといわれた。シンガポールで「ルック・イースト」のことばのとおりに日本をモデルとした社会改革が進められているのは周知のとおりだが、隣国のマレーシアも日本に対する関心が強い。

それだけに、子どもたちは、日本の話を耳を傾けてくれたが、そのうちに、どうやら日本へ行けるのか、あるいは、日本で暮らすのにいくらかかるかなどに質問が集中した。

次の日に近くの中学校で同じような話をした。そこでは、中学生らしく、日本の大学へ行って勉強したいという子が多くいた。そして、将来、日本へ行ったら会ってくれるかとたずねた子がいた。

正直にいって、クアラルンプールの生活は豊かではない。学校は二部授業だし、就学できない子も少なくないという。町でも働く子どもたちの姿を見かけた。こうした状況のなかでも、子どもは未来に夢を託し、ぜひトウキョウへ行ってみたいという。

井上靖の自伝風の小説『あすなろ物語』のように、あすは檜になろうと、檜になれる日を信じられるのが、子どもの特権であろう。少なくとも、子どもたちはなににでもなる可能性を残している。それにもかかわらず、日本の子どもたちがささやかな夢しか抱いていないのは冒頭で紹介したとおりである。檜になる日を夢みて、結果として、サラリーマンとなるのはよい。しかし、子どもならば、もっとビッグな望みを掲げてよいのではないか。

こちんまりとまとまった子どもたちを見るにつけ、「少年・少女よ、大志を抱け」と励みたい気持ちになる。フィーリング感覚の持ち主にそうした意欲が加わってくれれば、理想の育ち方という気持ちがする。

2. 若者論の流れの中で

考えてみると、このテーマを設定したときには、われわれは自分の青年時代とダブらせてテーマを語っていたように思う。そしてそうした話し合いの前提となったのは、かつての怒れる若者の姿である。

一昔前まで、若者と怒りとが同義語だったような気がする。怒れる若者たちといえばよいのであろうか、社会矛盾に敏感で、不正を憎み、肩を怒らせて、エスタブリッシュメントに対決しようとするのが若者らしさのあらわであった。

俗に、アンチ巨人は、裏返しの巨人ファンだという。巨人の勝敗に一喜一憂し、こだわりをもっているという意味では、たしかに、一種の巨人ファンなのであろう。それと同じように、怒れる若者も、既存の社会体制を意識し、社会体制にまきこまれまいとツッパッているという意味でのアンチ体制派となる。それと同時に、既存の社会的な価値を反面教師として、それと異質な生き方をしようとしているので、怒れる若者は、目標をもつ生き方をしているといえよう。

もちろんこうした若者は体制を批判するのであるから、つねにアンチ保守派で、なにはともあれ革新色を帯びる。

もちろん、歴史的にとらえると、こうした怒れる若者の以前に、自分たちの力で、未来を担おうとする若者の姿がみられる。司馬遼太郎の『坂の上の雲』には松山で青春を過ごした3人の若者の姿が描かれている。3人は、坂の上の雲を目指して向上心に燃えた生活を送っており、それが、正岡子規、秋山好古、秋山真之となる。彼らは、文字どおりの青雲の志を抱いており、日本の未来を自分たちの手で築こうという使命感が強い。現在でも発展途上国の大学などでこうした意欲に燃えた若者を見ることができる。

こうした場合、社会そのものが変革していくのであるから、体制的にも、革新にならざるをえないし、若者たちも、こうした流れにそって、そのプロモーターとしての役割を果たす。

しかし、社会が発展するにつれて、それまでのよう、若者の力を求めなくなる。それだけに、若者は自分の力を発揮できないことへのいらだちと、既成の社会のもつてゐるさまざまな矛盾に対する反発とが重なった形で冒頭にふれたような怒れる若者の姿となる。

石原慎太郎の描く『太陽の季節』に登場する若者が、その代表であろうが、残念ながらこうした怒れる若者は、学園紛争を最後に姿を消して、若者たちは怒りをあらわにしなくなった。

それでも、庄司薰の『白鳥の歌なんか聞こえない』や『ぼくの大好きな青髭』などで活躍する薰くんは、反抗をあらわにしないにしても、心の奥底には若者らしいナイーブさを残している。

かつてのヒッピーのように、かたくなに自分の感覚を大事にし、世の中と隔絶したところに自己主張をたくす生き方である。自分の手、足、目や耳以外のこととは信じないという姿勢である。

しかし、三田誠広の『僕って何』になると、本人が、自分の心をとらえにくくなり、さらに田中康夫の『なんとなくクリスタル』に登場する若者は、感覚のままにただよう感じとなる。

つまり、外面だけでなく、心の内でも、怒りがあらわにならず、自分の存在そのものを問う態度が薄れてくる。伝統的に、若者らしさとはアイデンティティの確立だといわれてきた。しかし、アイデンティティに関心をもつことなく、外部の刺激に反応するだけの若者が登場している。

さらに、日野啓三の『天窓のあるガレージ』に描かれている青年は、がらんとしたガレージの中で、スチール製の机やラジカセに囲まれ、ハードロックやシンセサイザーに聞き入る生活を送っている。

こうした書き方をすると、なにやら極端な生活のように思われるが、『天窓のあるガレージ』や『なんとなくクリスタル』は、決してまれな姿ではない。

このところ、若者たちの心をとらえたものにどんなものがあったのか、こころみに列挙してみよう。ヘッドホン・ステレオをはじめとしてカセット、タウン誌、ビニ本、テレビゲーム、パソコン、バイクなど、いずれもひとりで時を過ごすために作られたものが多い。

ヘッドホン・ステレオを耳にしていれば、それなりに自分の世界が広がってくる。そして満ち足りた感覚も味わうことができる。なにも無理をして人とふれ合う必要はないのである。

しかも、東京オリンピックの年に生まれ、幼稚園のころ大阪万博を見て育ったといふいわば豊かな社会の中で生まれ育った者は、すでに大学を卒業し、社会人として足をふみ入れている。当然そうした世代の者は、もの心がついたときにテレビが存在していた。いわば、テレビを子守歌代わりに育てきている。さらにいうなら、テレビは彼らにとっては孤立を慰めてくれる友でもあった。

そして、中学生になれば深夜放送がテレビにとって代わる。さらに、ラジカセもあればマンガ雑誌もある。

こう考えてくると、現代の青年たちが、人間的な絆をもつことなしに、いわば自閉化された育ち方をしているのに気づく。しかも彼らは、テレビやマンガ、ラジカセなど、さまざまなものに囲まれて生活しているので、孤独さを感じないですむ。もっとも孤独とみるのは、おとなからの見方で、若者たちは自分の感覚を大事に生活していると思うのであろう。

このところ、モラトリアムやピーターパン、そして、オブローモフなど、青年のさまがわりが、さまざまな切り口から伝えられことが多いが、それらの変化は、上述したような青年たちの自閉状況を背景として登場してきたものと考えられる。

このように、現代の若者は、自分の身の回りの中に埋没した生活を送っており、権威とは無縁といった生活のスタイルで毎日を過ごしている。もちろん、どの社会にせよ、権力機構をもたないはずはないのであるから、一見したところ、権威不在に思えても、その実、より大きな権威が若者たちを囲んでいる。その存在を若者たちが気づいていないというような構図も考えられよう。したがって、フィーリング感覚の若者たちにそうした気分に浸っているうちにふと気がついたら世の中がとんでもないところへ流れている危険性がないのかと問いたい気持ちになる。

3. 同質化社会のもろさ

しかし、若者たちがこうしたフィーリング感覚に頼れるのも、それを支える平和な土壌があればこそその現象であろう。

そこで思い出すのはフランクフルトの小学校を訪ねた時のことだ。20数名の子どもたちに、担任の先生が「日本からのお客さんだから、あなた方の名前とどこの生まれなのかを、

自分の国の言葉で話しなさい」と語りかけてくれた。ごく平凡な学校で、インターナショナルスクールでもないのに「自分の国の言葉」(national language)というのも奇妙だし、担任の言葉がその時ドイツ語から英語へかわり、しかも、そうした変化に子どもたちが、あたり前という感じでついていくのが印象的であ

った。

子どもたちが順々に立ち、自己紹介を始めたが、なじみの全くない言葉を話す子どもが少なくない。2、3人の子どもから、10か国を超える言葉がとび出してきたのである。スペイン語、トルコ語、ギリシャ語……が、その一例だが、ドイツ語を話した子どもは5人にすぎなかった。

さすがに、このクラスは極端な事例に属するようだが、教育委員会の話によると、フランクフルト市内の小学生のうち、ドイツ人は4割で、残りは外国人で占められているという。ヨーロッパ大陸が陸続きで移動しやすいに、ECの関係から各国間の就労移動が簡単なので、経済的に安定している西ドイツで働きたいと願う人たちが入国してくる。もともと、西ドイツの経済的な繁栄は、外国人労働者に依存していた部分が少くないので、経済にかけりが出たからといって、ただちに就労者を締め出すわけにもいかない。そうした事情が重なって、教室の中に外国人のほうが多い状況を迎ってしまったらしい。

言葉の違いは、いうまでもなく人種の違いを意味するから、食事や衣服などの文化的な面も異なってくる。それだけに、教育委員会としては、そうした多民族文化の中での教育をいかに進めていくのかに頭を痛めているようであった。

学級の中に、それぞれの母国語をもった何か国かの子どもがいるなどというと、特別な状況と思いつがちになる。しかし、世界的な視野でとらえ直すと、多民族国家の中での教育課題に当面している国のはうが、むしろ一般的であって、日本のように、校内に何百人もいる子どもの全部が同じ言葉を話すのは、少数派に属する。

具体例をマレーシアにとってみよう。マレーシアの場合、マレー系の47%が主流だが、その他に中国系が34%、インド系9%などとなる。そのうえ、同じ中国系の中でも、福建、廣東、北京など、出身地により、文化や言語を異にしている。さらにいえば、マレー系は

イスラム教、インド系はヒンズー教、中国系は仏教を信じている。もちろん、この場合も、厳密にいうと、中国人の中でも、廣東系は家の入口に天神を、福建人は天官賜福をまつるというように、宗教のスタイルにかなりの開きがみられる。

しかも、マレー系のイスラム教徒が豚肉を、そしてインド系のヒンズー教徒が牛肉を禁忌するのはよく知られた慣習だが、そうした慣習の違いは、出生から結婚、そして死亡にいたるそれぞれの場面で表面化していく。

マレーシアでは、そうした多民族国家の難しさを、マレー語を国語化することで解消しようとしており、1970年から、学校でもマレー語の授業が徹底されるようになったという。

マレーシアを訪ね、クアラルンプールの小学校を見学する機会があった。教師たちの多くは、1970年以前に教育を受けているので、英語が得意な人たちである。そのため、この10年の間にあらためてマレー語を習い、教壇に立っているとのことであった。そうした形でマレー語化を図っても、民族的な慣習の相違を否定するわけにはいかないから、さまざまな形で人種間の歪みが生じてくる。

クアラルンプールをガイドしてくれた通訳は、日本に何度も来たことのあるマレー人だったが、日本の同質性がなんともやましいと語っていた。そして、マレーシアは大豆とあずきと大麦を混ぜたようなもので、お互いに同化を求めるすると紛争が生じやすい。大豆は大豆なりの個性を保ち、その生き方を主張すると同時に、あずきの生き方を認める。そうした形で、完全に混ざりあうのではなく、それぞれが個性を持って共存するのが多民族国家の現実の姿なのだと。ミキサーにかけてミックスするのではなく、固体の形を保ったままモザイク社会を作る形式である。マレーシアを訪ねたあとに、シンガポールへ行った。1965年にマレー人優先政策をとるマレーシアから独立しただけあって、ジョホール水道を隔てただけなのに、雰囲気ががらりと一変する。

マレー語にかわって英語を中心に、それに中国語などが加わる二言語主義が定着している。もっとも、シンガポールの民族別の構成比は、中国系77%、マレー系15%、インド系6%と、中国系が圧倒的な比率を示すから、中国系の色彩が強まるのは否定し難い。しかし、ホテルへ戻ってテレビをつけると、時間帯によって、英語、そして中国語、マレー語のニュースが聞こえてくる。また、中国語のドラマに英語の字幕がかかる。それとは逆に、英語の映画に中国語のテロップが入る場合もみられる。

英語と中国語を中心に、2か国語の使用を促す政策は、学校教育の中にも導入されており、小学校では、週あたり、第一外国語に7.5時間、第二外国語に6時間を割り当てる時間割を採用していた。そして、中学校でも、第一外国語に8時間、第二外国語に6時間の時間配当がなされている。

今度は、アメリカの例をあげてみよう。ロサンゼルスの近くで、複数の言語を使用する学校を訪ねたことがあった。メキシコ人系、韓国人系と日本人系の多い校区で、学校内は、純粹のアメリカ人を含めて、4つのセクションに分かれていた。

校長の話によると、一昔前まで、アメリカでも、どの子たちにも英語を話すようにとの指導に努めたという。しかし、そうした考え方そのものは悪いとは言い難いが、残念ながら、国語の力だけに限ると、アメリカ人のほうが優れている。そこで、見方を変え、それぞれの国には、その国の言語がある。その言語を尊重しながら、英語も熟達させるようにする。そして、2つの言語の力を合わせて、その子どもの国語の力とみなす。そうすれば仮に英語が4の力しかなくとも、中国語が9の力であれば、全体で13の力となり、英語しか使えない子どもよりも言語の力が優れている計算になる。

つまり、日本人系の子どもの英語の力が劣っていても、それをハンディを負っていると見ずに、日本語ができるうえに英語もできる

というように考えようというのである。

こうした見方に基づいて、この学校では、それぞれの母国語と英語とをミックスする形の2か国語教育を開催していた。せっかく日本文化に接して育ってきたのに、それを棄て去ってアメリカへ同化したところで、個性は育ってこない。日本文化を身につけながら、アメリカ文化も獲得できれば、2つの文化圈に精通した個性豊かな人間に育つ。2か国語教育はこうした2つの文化圈をもつ国際的な子どもの育成をめざしているのだという。

実をいうと、冒頭でふれたフランクフルトでも、同じような話を耳にしていた。ドイツの学校に在籍しているのだからという理由で、ドイツ語への適応を強制したが、かならずしもうまくいかなかった。そこで、この数年来の傾向として、母国語にドイツ語を加える形を強めてきた。そのため、時にはギリシャ語やトルコ語の話せる教師を採用して、母国語を生かしながら、ドイツ語もマスターできるようなプログラムを編成した。結果は、きわめて順調で、財源的な裏づけがあれば、この方式を市内の全学校へ広げたいとのことであった。

フランクフルトを訪ねたあと、スイスへ飛んで、チューリッヒ郊外にあるペスタロッチ子どもの村を見学した。ここは、戦争のため両親を失った子どもたちなどを収容する国際的な子ども村で、20数か国の子どもたちが集まっていた。

第二次大戦中に開村したところなので、すでに40年以上の歴史がある。この村で興味深かったのは、その国の文化を大事にしている点で、初めのうち、すべての子どもをスイスへ帰化させようとしたが、不適応をおこす子どもが少なくなかった。そこで、十数年前より形を変え、その国ごとのホームを作り、両親格のカウンセラーをホームに住まわせて、ホームの中では、国ごとの独自性を大事にした家庭的な生活を送らせる。そして、村としての共通の勉強や仕事は、村の中央にある学校へ通って身につける形をとっていた。

それぞれの文化を尊重するところから、共通理解ができ、そして個性も育ってくるという見方である。

日本でも、子どもの個性を語ることが多い。しかし、なんとなく個性が育たず、どの子どもも規格化された感じで育っているような印象を受ける。

しかし、こうした現象も、今までふれてきたような諸外国をイメージに置くと、無理からぬ気持ちもしてくる。同じクラスの友達の中で、皮膚の色はむろんのこと、違った言葉を話し、まったく異質の食べ物を食べる子どもがいる。しかも、それが1人ではなく、何人

もいる。そうなれば、一人ひとりは、違う存在としての認識をもてよう。

正直にいえば、こうした異質性をふまえた上で、フィーリング感覚ならば、おのずと幅が生まれてくる。しかし日本の場合、同質化の中でのフィーリング感覚となるので、なおのこと、同質化が進みやすく、それが、同調行動となる。そして、逸脱や異端を排除しがちなので、フィーリング感覚が文字どおりに現状維持、そして、保守化そのものとなる。

こうした観点に立つと、教育の国際化を進めることも、若者の保守化をうち破るために一つの手がかりとなろう。

